

実践事例

1 実践の概要

(1) 取り組みのねらい

- ◎教師自身のいじめに対する認識を深めるとともに、生徒の深層での理解に努める資料とした。
- ①生徒1人1人の悩みごとや困りごとを把握し、早期に対応できるようにした。
- ②いじめの被害情報や目撃情報をもとに、いじめの有無や実態を把握して、指導に生かした。
- ③アンケートの結果をもとに個別の教育相談を実施するなど、問題の早期解決につなげた。

(2) 取り組みの内容

「悩みごと・困りごと・いじめアンケート」の実施

- ①全生徒を対象に、学活の時間や家庭で記入させる。
- ②記入された用紙は、担任→学年主任→生徒指導主事→教頭→校長の順で目を通し、気になる案件に関しては、担任だけでなく、学年や生徒指導委員会で速やかに対処した。
- ③6月と11月の年2回実施した。

2 実践の成果

- ①生徒のほとんどが何らかの「悩みがある」と回答した。
- ②アンケートの結果をもとにして教育相談を実施し、担任を中心として悩みごとの相談にのったり、助言を与えたりした。
- ③いじめについての回答は、多くはなかったが、目撃情報や被害情報が得られた。
- ④いじめと思われる案件に関しては、対象生徒に直接話を聞いて実態を把握し、学年を中心に速やかに対処した。

3 取り組みの評価

(1) 成果

- ①全生徒を対象にアンケートを実施することにより、生徒がかかえている問題の傾向を知ることができた。また、1人1人の生徒の悩みや心の状態を把握することができた。
- ②回答にあった気になる案件に関して、具体的な内容について生徒から直接情報を聞くなど、速やかに適切な対応をすることができた。
- ③担任ばかりでなく、学年主任や生徒指導主事も目を通し、情報を共有化し、担任1人に任せるのではなく、学年や学校全体として対応することもできた。
- ④今回のアンケートは年間に2回の実施であるが、他に「生活記録ノート」を全生徒に毎日提出させて担任が目を通すことにより、継続的に心の状態の把握に努めている。

(2) 課題

- ①スクールカウンセラーや養護教諭と情報を交換しながら、生徒が常に様々な教職員に相談できる体制を整えたりすることも重要であるとする。
- ②学級活動などの時間に、深刻な問題を共有するための「考える時間」を有効に活用していく。

4 実践に関する資料（別紙）

